ここから始まる、あなたの民泊物語

読谷に、新しい家族ができた。

ちゅらむら読谷

初めましての土地が、いつの間にか帰りたい場所になっていた。

「めんそ〜れ〜」
「よく来たね〜！」

そう言って、素敵な笑顔で
迎えてくれたおじいおばあ。

家に行くまでは、
「どんな人なのか」
「どんなことをするのか」
ドキドキとワクワクで
いっぱいだった。

でもおじいおばあと会った時、
なぜか不思議と
「はじめまして」の感覚はしなかった。
なんでだろう。

民家さんとの1日

A DAY IN THE LIFE OF CHURAMURA

1日目 16:30
お野菜に感謝
Oyasai Ni Kansya

18:00
くわっちーさびら
Kuwattisabira

20:00
ゆんたくの時間
Yuntaku No Zikan

22:00
まだまだ続くよ
Madamada Tuzukuyo

2日目 09:00
朝からカメーカメー攻撃
Asa Kara Kame-kame-kougeki

11:00
いちゃりば家族
Ityariba Kazoku

トントントン ジュージュー

台所にはたくさんの音が溢れている

おばあが横で「これはこう切って、あれは水にさらして」
と言いながら手際よく料理を教えてくれる。
おばあさすが、料理早い。

お腹も心も満たされる時間

どんな料理より１番落ち着く手作りの味

１番の隠し味はみんなで作って食卓を囲むこと

「もっと食べて〜ダ〜ダ〜！」
「お腹いっぱいでもう食べられないよ笑」

他愛もない会話のなかに、
愛おしさと懐かしさを感じる

普段の旅行ではできない体験をココで

土の匂いと、お野菜の色鮮やかさ。
良い汗流しながら収穫するお野菜は
いつもスーパーで見るお野菜よりキラキラしてた。美味しそう。

別れの時に

「いちゃりば家族」を感じた。

一度出会えば、みんな家族
自分らしくいられて、認めてくれて、また帰りたい場所
ありがとう。また、帰ってきます。

「私たちは、世界中に子どもたちがいるんだよ」
「この家に泊まった子達は２０００人
超えるくらいいるのかな～」

１人１人が何に喜んで、驚いて
どんな景色を一緒に見て過ごしたのか
どんな味が好きだったのか
どんなことで悩んでいたのか
鮮明に覚えているそうだ

「いつでも家に帰っておいでね、そのときは思い出話をしようね」

ここ読谷で知った人の暖かさ、
匂い、風景、時間、大きな愛は記憶に残る。

豊かな緑、青い海ではなく、『人』に焦点を当てた読谷民泊。
同じ屋根の下で時間を過ごし、暮らしを通して
本当の家族になる。
村民を巻き込んだ読谷民泊は
世代、国境を越えた交流の場。

〒904-0423
沖縄県中頭郡読谷村高志保 1046

churamura_yomitan
TEL 098-958-1130
WEB https://churamura.com/

ちゆらむら読谷

「いちゃりば家族」
一度出会えば皆家族。をテーマに掲げ
修学旅行生や海外からのインバウンド
一般観光客向けの民泊事業を運営しています。

2006年からこれまでの15年間で、この読谷村は
約15万人の人にとっての「第二の故郷」になりました。

インターンシップ生

広島県出身 宮本 梨香子さん

初めての沖縄が第二の故郷になった。

「私は元々沖縄きたことがなかったので、読谷村に来るのももちろん初めてでした。」

そう話すのは元祖インターンの宮本さん。

初めての土地で不安なことはありましたか？

「初めての土地で身構えていた私を自然体にしてくれたのは、目の前の人、会いに来てくれた人を歓迎してくれた民家さんとその空気感があったからかな～」

「読谷での生活が楽しすぎて、家族には帰ってこないと思われていたらし（笑）」

家族にそう言われるくらい楽しさが伝わっていたんですね！

民家さんと関わる中で感じた思いや、心に残っているエピソードはありますか？

「何気ない家族の話だったり、友人関係だったり、恋の悩みも、本当の娘のように聞いてくれたり、沖縄の昔話を聞いて、今の生活にありがたみを感じたりする時間が増えた」

「イチャリバ家族を本当に体感できる場所で、社会人になっても結婚しても、嬉しいことも悲しいことも、全部報告する為に会いに行きたい！

第二の故郷ができたのが本当に嬉しい。」

そう話してくれた。

「目の前に見えていること、人や時間を大切にすることを学びました。

大好きな帰りたくなる故郷がここ沖縄に読谷になりました。」

インタビュー

11月のスタディーケーションをきっかけに沖縄沼にハマる。

神奈川県出身
小椋雄太郎さん

これまでに計5回の来沖経験があると話す小椋さん。
インターンをするまでの経緯や、思い出について話て頂きました。

ちゅらむら読谷との出会いのきっかけは何ですか？

「昨年11月に沖縄に来た時に、梨香子の読谷村、ちゅらむら読谷に対する愛に触れた時にちゅらむら読谷で僕も何かしてみたいと思うようになった。」

11月に自身がスタディーケーションと称し大学生がリモート授業がどこでも受けられることをプラスに考え、大学生にもっと沢山の自由な選択肢を。という思いで沖縄にきた。その時に出会ったのが宮本さんだったという。

読谷村に行って初めに思った率直な感想を教えてください！

「読谷村は日本で一番人口の多い村と聞いていて、そこそこの都会？なのかと思って行ってみたら、そこにあったのは海とサトウキビ畑。家はたくさんあるけどすごいところに来たなって思った。（いい意味で）」

たしかに。そんな読谷村での3週間の中で心に残っている事はありましたか？

「『よく寝れた？』『今日も頑張ってね！』『疲れたらいつでも帰ってこい。』ってインターン期間に声をかけてくれた民家さんだったり、朝コインランドリーまで行って乾燥してくれてパンツも畳んでくれたり笑
サトウキビかじりたいって言ったら連れて行ってくれたり、食べそうな体しているからってたくさんご飯を用意してくれたり、民家さんから無償の愛をもらった。
読谷村のおじい、おばあが僕を愛し、優しくしてくれたように、自分も関わってくれている全ての人に優しさをそして笑顔にしたいなって本気で思えるような経験になった」

なるほどね～！
だから、民泊したとき違和感感じず、自然な感じがしたのか。

そういえば、「子守り」っていう言葉も印象に残っている。
民家のお母さんが私たちと過ごした時間のことを「子守り」と
言っていて、お客さんとして接しているわけではないんだなと感じた。

じゅじゅは民泊初めてだっけ？
体験してみてどうだった？

血の繋がりだけでない家族の形を感じた。
民家さんと同じ空間、時間、生活を共にする中で人の暖かさや
優しさを感じて民家さんが本当に愛情を持って取り組まれてい
るものだなと思った。
友達と兄弟になれたような感覚も新鮮だった！！

本当に素敵な体験ができたよね！
そしたら最後に、今回『ちゅらむら読谷の民泊』を
フリーペーパーにしようと思った理由を教えて欲しい！

多くの人に民泊のことを知ってもらいたい。
そして今の時代、情報発信のツールとして SNS という方法もあるが、
フリーペーパーとして印刷することで、みんなに知ってもらうだけで
なく、この冊子を民家さんのもとに届けることができ、この読谷民泊
は、皆が残したいと思っているものなんだと、民家さんに伝えること
ができると思ったから！
このご時世で、修学旅行生の受け入れや民泊を利用する人が減って、
民家さんたちの活気も下がりつつあるらしいから、このフリーペー
パーを通して、民家さんにも元気になってもらいたい！

＼編集者による／

民泊体験　対談

Director

萬壽 洸樹

Director

山岸 菜々未

Designer

喜屋武 明依

Writer

松田 鉄矢

Photographer

梅田 珠寿

それではさっそく民泊の時の思い出を聞いていくね～
ななみん、民泊体験でどんなことをした？

農業したり、収穫した野菜を使って一緒に料理もしたよ！！

一緒に料理してみてどうだった??

普段は１人暮らししているから、
久しぶりに誰かと料理することができて嬉しかった。
お母さんも一緒になって恋バナも盛り上がったし♡
そういえば、天ぷらを作ったんだけど、揚げる時に鍋にタネを
入れすぎて、「あんた～いれすぎよ！」って怒られた（笑）

たしかに！そんなやり取りあったね（笑）
きゃんめいは、一緒に過ごした時間の中で、印象に残っていることある？

あー！あるある！
民家さんが「お母さん」っていう一人称を使っていたことかな。
まだ、初めましての挨拶して間もない時に、何気ない会話の中ですごい
自然に言っていたから、受け入れられている感じがして嬉しかった!!

人と人とが出会うキッカケが失われ
時代の流れが大きく変わってしまった今。
それでも世代を超えた人との繋がりは
決してなくしてはならない。
残し続けて行きたい。

そんな気持ちを込めて、このフリーペーパーを作成しました。
次はこの冊子を読んでくれたあなたにとって
読谷という地が、帰りたくなる故郷になりますように。
あなたを待つ人が、あなたと出会えますように。

あなたを、待っている人がいる。

目まぐるしく進む時間。
歳をとっていく私たち。
変わっていく景色。

同じ時をここ読谷で過ごし、沖縄の暮らしに触れる。
そこには、愛を感じることができる家族の形があった。
故郷の匂い、風景、時間、家族、大きな愛。
着飾ることを忘れて、私たち全てを
ありのままに受け入れてくれる。
自然体に帰してくれる。

ゆっくりとすぎていく時間の中で
「ただいま」
「おかえり」
「いただきます」
そんな当たり前の言葉たちが特別に感じる不思議な場所。